東播

石の宝殿、竜山石めぐり
研究者4人が解説

高砂

高砂市の「石の宝殿と竜山石採石遺跡」の国史跡指定を記念したフォーラム「播磨国風土記と石作集団」が15日、同市阿弥陀町生石の市勤労者総合福祉センター「ふれあいの郷生石」であり、4人の学者が竜山石や古代王権と石棺に関する講演などを行った。

同市と県教育委員会の共催で、約350人の歴史愛好家が聴講した。シンポジウムは聴衆からの質問に対する回答が中心で「石の宝殿は石棺か」との疑問に、大手前大史学研究所の魚津知克主任は「技術の高さをPRする（石棺の）一種のショールームだったのでは」と述べた。

「石の宝殿の発注者は」との問いには、神戸大大学院の古市晃准教授が「王権が絡んでいると思うが、まだ分かっていない」と説明した。

シンポジウムの最後に、京都府立大の菱田哲郎教授は「王者のひつぎをつくったという古代石作集団の誇りが、産業として採石が現在まで受け継がれている源泉だ」と指摘。新潟大の中林隆之教授は「（石の宝殿に関する）多くの謎を市民と交流しながら明らかにすることで、文化的都市としての成長にもつながるのでは」と期待した。（小林隆宏）

石作集団と王権の関わりなどについて議論が交わされたシンポジウム＝高砂市阿弥陀町生石